

ヒトの利他行動に関する発達心理学的研究
—共同養育社会の実現に向けた展望

等々力 花歩

要旨

ヒト (*Homo sapiens*) は、他者を助けたり物資を分け合ったり、他者のために振る舞う動物である。このように、行為者が自身のエネルギーや時間などのコストを割き、他者に利益を提供する行動を利他行動 (*altruistic behavior*) と呼ぶ。利他行動はヒト以外の動物においても観察される。しかし、ヒトの利他性は、近縁な種であるチンパンジー (*Pan troglodytes*) と比較しても、利他行動が起こる文脈の多さや、相手からの要求を必ずしも必要としない点、他個体に物資を分配するという点で特徴的である。

なぜ、ヒトはこのような利他性を進化の過程で獲得してきたのだろうか。ヒトの利他性の適応的意義の1つに、ヒトの繁殖や命の継承における意義があると考えられる。ヒトは、子どもの母親だけでなく、父親や兄弟、親戚、血縁関係に無い他者などの複数の人々で子育てを行う、「共同養育 (*alloparenting*)」という子育て形態によって、母親の負担を分散させ、進化してきたと考えられている。子どもの世話、そして共同養育は、世話を行う個体のエネルギーや資源を割くことから、利他行動の1つといえる。保育園や児童養護施設といった母親以外の者が子どもの世話をする仕組みがヒトの社会に組み込まれていることから、ヒトは、血縁関係に関わらず複数の他者が協力して子どもを養育するという社会システムを構築してきたといえる。

しかし、現代日本においては家族の在り方が変化しつつある。日本において、児童がいる家庭のうち、養育者とその子どもから構成される核家族世帯は増加している一方で、三つ以上の世代から構成される三世代世帯数は減少しており、現代日本の子育て世帯の多くは、養育者とその子どものみで生活していると推察される。他方で、父親の育児休業取得率やその期間、育児に携わる時間は、依然として母親に比べて低いままである。また、地域社会のつながりの希薄化も指摘されている。これらを踏まえると、現代日本では、母親以外の他者が子育てに関わり共同養育を行うことが難しい状況にあり、その結果、母親が過度な育児負担を抱えやすい状態にあると考えられる。

ヒトが利他的な動物であるのならば、なぜ、父親と母親で育児休業取得率に差が見られたり、地域に子どもを通じて関わっている人がいない子育て世帯が

存在するのであろうか。その1つの見方として、本論文では、利他性の程度には個人差がある点を挙げる。ヒトであるからといって、皆が一様にその利他性を活かし、共同養育に参画するわけではないと考えられる。他者のために振る舞うことは一般的に「善い」とされており、子どもにさえもそのような姿が求められる。しかし実際には、他者をためらいなく助けることができる人もいれば、そうでない人もいる。重要なのは、なぜ利他性の個人差が生まれるのか、そしてそもそもヒトの利他性の発達の変遷とはどのようなものであるのかを、科学的根拠に基づいてその機序を明らかにすることである。そうすることで、利他性はどのように育まれるのか、また、支援が必要であるならばそれはどのような内容か、建設的に議論することが可能になると考える。

他方、利他性に個人差がある中でも、また、共同養育が難しくなった現在でも、日本では様々な育児支援が実施されている。育児支援は、養育者やその子どもを支え助けることを目的とするという点で、他者のための利他的な取り組みであり、ヒトの利他性があるからこそ可能になる社会システムの1つであると考えられる。従来の育児支援の多くは、一時的な支援や家庭外での支援、啓発運動を主としている。しかし、実際の子育ては十数年以上行われ、家庭の中でも多くの時間を過ごすことを踏まえると、今後はより長期的に、なおかつ養育者と子どもが日常生活の中で活用できる、新しい育児支援策が必要であると考えられる。

以上の議論を踏まえ、本論文では以下の構成により論を展開した。まず、第1部第3章～第5章では、なぜ利他性の個人差が生まれるのかという点に着目し、乳幼児期における利他性の発達の変遷や、促進要因、個人差要因について、先行研究や著者自身が得た実証データをもとに検討した（研究1）。続く第2部第6章～第7章では、長期的かつ日常的に活用できる育児支援として、近年注目が集まっているAIやロボットを活用した支援に着目し、その現状を把握するとともに、著者が得たデータをもとに支援のニーズやその個人差を明らかにした（研究2）。総合考察として、第8章～第9章では、第1部と第2部で示された研究の知見を実社会に活用するという視点から、実際の育児場面や保育現場でどのように乳幼児期の利他性が育むことができるのか、また、育児や保育におけるAIやロボットの活用可能性や、個別型の育児支援の実施に向けて検

討すべき事項について考察した。最後に、最終章である第 10 章では、現代日本における共同養育社会の実現の必要性和、それに向けて必要な支援や社会制度について展望した。

本論文は 10 章から構成される。第 1 章では、ヒトの利他性の特徴やその適応的意義について論じた。まず、本論文におけるヒトの利他行動ならびに利他性を定義し、利他性の進化に関する説を概観した。続いて、ヒト乳幼児の利他行動とチンパンジーの利他行動の比較研究の知見をまとめ、ヒトはチンパンジーに比べて、様々な文脈で、時には相手が助けを求めているなくとも他者を助け、また、他者に物資を分配する特性を持つことを示した。さらに、ヒトの利他性の適応的意義として、繁殖における意義に着目し、ヒトの共同養育の特徴やその機能について概括した。

第 2 章では、前半で、現代日本における子育てを取り巻く問題について整理した。具体的には、まず核家族化、少子化の現状を統計データに基づき把握した。続いて、少子化の要因の 1 つに過度な育児負担が挙げられていることを示し、養育者の心身の負担に関する研究データについてもまとめた。さらに、父親の育児休業取得率などのデータを踏まえ、現代日本では共同養育の実施が難しい状況にあることを指摘した。後半では、ここまでの内容を踏まえ、本論文の目的と構成を示した。

第 3 章では、ヒトの利他性の萌芽が見られる乳幼児期に焦点を当て、ヒトが生まれ育つ中で、利他行動はいつ頃表出し発達していくのか、先行研究の知見を概括した。援助行動、分配行動、慰め行動の 3 つの利他行動に関する発達研究の知見をまとめた結果、行動によって、表出時期や発達の変遷、行動表出のために必要とされる認知機能や心理的動機は異なっていた。

第 4 章では、乳幼児期の利他行動の関連要因として、個人差要因と促進要因に着目した。先行研究の知見をまとめると、次の 2 点が示された。1 点目に、援助行動、分配行動、慰め行動の表出の程度には、乳幼児期から既に個人差が見られていた。2 点目に、利他行動の表出の促進要因として、他者との行動同期経験が乳児の援助行動の表出に影響する可能性が指摘されていた。しかし、他者との行動同期経験の前後での援助行動の表出の変化にどのような個人差があるのか、そしてその個人差要因については明らかになっていなかった。

第5章では、第4章の内容を踏まえ、他者との行動同期経験が、乳児の援助行動の表出に与える影響とその個人差について実証的に検討した（研究1）。生後15か月児を対象に、実験者と行動が同期する経験、もしくは、実験者と行動が非同期する経験を提示し、経験の前後での援助行動の表出割合の変化とその個人差について調査した。その結果、援助行動の表出割合の変化の有無やその傾向は一樣ではなく、個人差が見られた。さらに、行動同期経験の前後で援助行動の表出割合が増加した乳児は、泣きや悲しみといった否定的情動性に関する気質が高い傾向にあった。このことから、他者との行動同期経験が乳児の援助行動に与える影響には個人差があること、またその個人差は、乳児の気質と関連していることが明らかになった。

第6章では、利他性としての育児支援に焦点を移し、近年注目が集まっているAIやロボットなどの情報技術を用いた育児支援について、その現状をまとめた。日本では、妊娠期からを対象とした赤ちゃんに関する情報技術（i.e., ベビーテック）の活用が進められている。既存のベビーテック製品の特徴をまとめたところ、その多くは養育者の代替物として役割を担っており、育児の省力化・利便化を主目的としていた。他方、先行研究では、ヒトは子育て経験を積むことで親としての脳と心を発達させていくこと、そして、その発達には個人差が存在することが報告されており、養育者側の個人差を踏まえた育児支援の実施の必要性が示されていた。育児場面における養育者の個人差に関連する主たる要因の1つとして、気質や育児ストレスがある。しかし、どのような気質や育児ストレスを持つ養育者が、情報技術やAIにどのような育児支援を求めているのか、そしてそこにはどのような個人差があるのかについては、明らかになっていなかった。

第7章では、第6章の内容を踏まえて、子育て中の養育者がロボットに対してどのような育児支援を求めているのか、また、そこにはどのような個人差があるのか、調査した（研究2）。2～4歳の子どもを子育て中の母親を対象に、質問紙調査とWebアンケートを実施した。その結果、母親の個人特性は、育児ストレスが高くネガティブな気質を持つ群と、育児ストレスが低くポジティブな気質を持つ群の2つに大別された。さらに、育児ストレスが高くネガティブな気質を持つ母親群は、育児ストレスが低くポジティブな気質を持つ母親群に比

べて、ロボットに子どもの泣き声を緩和する支援を求めている。この結果は、ロボットにどのような育児支援を求めているのかには個人差があり、それは母親の個人特性と関連していることを明確に示している。

第 8 章から第 9 章では、これまでに得られた研究の知見を実際の社会にどのように活用していくのかという視点から、総合考察を行った。まず、第 8 章では、第 3 章～第 5 章で示された知見をもとに、乳幼児期の利他性発達を促すための養育者や保育者の具体的な関わりについて考察した。乳幼児の利他性発達には、乳幼児自身の発達だけでなく、養育者や保育者の関わりも重要な役割を果たすと考えられる。実際に、保育所保育指針でも、乳幼児が他者との関わり方を身に着けることや他者に対して思いやりを持つことが、ねらいや内容として位置づけられている。しかし、そのような力を育むための保育者の関わり方について、具体的な方針は示されていない。そこで本論文では、乳幼児の利他性発達を促すために、養育者や保育者が乳幼児にどのように関わるのがよいと考えられるのか、エビデンスに基づいて提案することを目指した。本章ではまず、援助行動、分配行動、慰め行動のそれぞれについて、養育者や保育者の関わりや声かけを提案した。続いて、利他行動の表出には個人差があることを踏まえ、利他行動を表出しにくい傾向にある乳幼児への関わり方や声かけについて考察した。最後に、乳幼児への関わりを考える上での留意点を述べた。

第 9 章では、まず、第 6 章の内容をもとに、育児や保育における AI やロボットの活用の方向性について展望した。現在の AI やロボットは、基本的に、予め設定された目的や目標を達成するために作動する仕組みであるといえる。他方、育児や保育では、個々の子どもの発達や特性に応じた個別的な目標や関わりの内容を考え、実践していく必要がある。しかし現状において、育児や保育で使用されている従来の AI やロボットのほとんどは、全ての使用者に対して一律のサービス内容を提供している。これを踏まえると、少なくとも現時点では、AI やロボットを全ての育児場面や保育場面において活用していくことは難しいと考えられる。そこで本論文では、AI やロボットを「共同養育者」として活用する方向性を新しく提案し、その内容について展望した。続いて、養育者への育児支援に焦点を移し、研究 2 で示された知見をもとに、個別型の育児支援の必要性と、その実施に向けて検討すべき事項などについて考察した。

最後に、第 10 章では、本論文全体の総括として、現代日本で共同養育社会を実現していくことの重要性について、そしてその実施に向けて必要な支援について展望した。ヒトの利他性には、乳幼児期から個人差が見られる。これを踏まえると、全てのヒトが一律に、共同養育に参画しようとするわけではないと考えられる。他方、現代日本では核家族化や少子化が加速しており、事態の改善は急務である。ヒトが共同養育によって進化してきたという生物学的制約を踏まえると、現在の共同養育システムを発展させ、「共同養育社会」を実現することが必要であると考えた。本論文では、その実現に向けて、家庭内における共同養育者として期待される父親と、養育者とその子どもに長期的に関わる共同養育者としての保育士に着目し、これらの役割を担う人々への支援や社会制度の充実化の必要性について考察した。父親については、育児休業の取得の重要性を踏まえ、取得を難しくしている要因とその解決案について議論した。さらに、父親の親としての脳と心の発達の個人差を踏まえた育児支援の実施の必要性についても考察した。保育士については、子どもとその養育者を支えるという社会的機能を担う存在であることを踏まえ、保育士に関する社会制度の改善の必要性について議論した。また、現在の日本では、高い専門性や動機づけを持つ保育士を評価するための仕組みが整っていない点について指摘し、制度整備の必要性や、保育士としての専門性をどう評価しうるのか議論した。現代日本で共同養育社会を実現していくためには、今後、ヒトの特性の個人差の詳細を明らかにするための基礎研究の推進と、当事者の視点に立った支援や取り組みの提案が重要である。